

[特集：地域と民族の生活文化]

中国青海省チベット族の民俗文化¹⁾

——他民族との交流と融合——

Folk Culture of the Tibetan People in Qinghai China:
Interactions and Fusion with Other Ethnic Groups

李 連 榮

LI Lianrong

中国社会科学院民族文学研究所副研究員

Institute of Ethnic Literature, Chinese Academy of Social Sciences

E-mail: brtsonvgrus@cass.org.cn

Abstract

This paper introduces in details the history, present life and folk culture of Tibetan people in Qinghai Province through surveying the characteristics of its geographic circumstances, multi-ethnic history and composition of local population. Furthermore, the author also makes a clear explanation on the popular cultures of both the Tibetans living in agricultural and pastoral areas, their including clothing, housing, food, events and festivals, folk literature, religious beliefs and rituals. Lastly, the author argues that there is a deep relationship existing among the folk cultures of the Tibetan, Han and Hui peoples.

I. 青海省の概況

1. 地理的環境

青海省は、中国西北地区の中南部に位置する青海チベット高原にあり、中国の二大大河である長江と黄河はともにここに源を発する。東と北は甘肅省と接し、西南部はチベット

1) 本稿は愛知大学国際コミュニケーション学会主催で開催された第40回国際学術交流プログラム・第2回フォーカライフ研究会における講演記録にもとづいている。司会を務められた周星教授、通訳の高木立子さんに感謝を申し上げる。

自治区につながる。東南部は四川省と接し、北西部は新疆ウイグル自治区と隣接している。面積は72.12万 km²で、中国では新疆ウイグル自治区、チベット自治区、内モンゴル自治区について第4位の広さの省である。

青海省はチベット自治区とともに、「青海チベット高原」に属し、「世界の屋根」と呼ばれるところにあり、平均海拔は3000メートル以上に達する。全体としての地形は西高東低で、南北が高く、中部が低い。地形的には、大きく三つの部分に分けられる。すなわち、東北部の祁連山地区、北西部のチャダム盆地と南部の高地である。(1)祁連山地区は、北は河西回廊を、南はチャダム盆地をその境とする地域で、北西から南東に向けて走る皺状の山脈と谷からなっている。山地は良質の草が生え、重要な天然の牧場になっている。谷の部分には青海湖盆地や東部の河湟谷などがあり、気候は温暖で土地も肥沃なため、青海省の古くからの農耕地として、主に穀物を生産している。(2)チャダム盆地の周囲は、阿爾金山、祁連山、崑崙山、布爾汗布達山に囲まれている。中国第三の内陸盆地で、鉱物資源が豊富なため、「宝の山」といわれている。(3)青海南部高地は主に崑崙山とその支脈の可可西裏（ココシリ）山、巴顔喀拉（バイエンカラ）山、阿尼瑪沁（アニマチン）山からなっている。この地域は青海省でも標高の最も高い地域で、平均5000m以上ある。西部と南部はそれぞれ蔵北高原、川西北高原につながっている。雨や雪が豊富で、多くの湖や沼があり、長江、黄河、瀾滄江（三江）の源流となっている。水資源と水産資源はともに非常に豊富である。青海南部高地の東北部は比較的標高が低く、2,500mから3,000m程度である。気候は温暖で、放牧や農耕に適している。

青海省の気候は、典型的な大陸性高地気候で、気温は比較的低く、気温差が大きい。日照時間が長く、降水は少ない。年間の平均気温は-5.6℃から8.6℃である。農耕地と放牧地の面積比は、1対9である。日月山から東が農耕地区で、コムギ、ハダカムギなどの穀物や、ソラマメ、エンドウ、バレイショなどを生産している。主な放牧地区は、祁連山、青海湖周辺（写真1）、青海南部などである。ヤク、メンヨウ、馬などを飼っている。

2. 歴史と民族

青海省地区の歴史 青海省では、旧石器時代の打製石器や新石器時代の陶器、青銅器が多く発見されている。特に河湟地区には、新石器時代晩期の馬家窯文化、銅石器併用時代に相当する齊家文化、青銅器時代に



（写真1）青海湖

相当する辛店文化などが広く分布している。青銅器時代に相当する、湟中県のカユエ文化や、チャダム盆地で発見されたノムホン文化は、地方色の濃い古代文化である。この一帯では、ほかにも一連の新石器時代と青銅器時代の文化遺跡及び墓が多く発掘されている。考古学の研究によると、今から4-5000年前の物だという。

文献によると、この地域に最も早く現れたのは氐、羌部族である。夏・商時代、羌人は青海東部に定住し農耕を始めた。漢の始め、匈奴と羌人の連絡を断ち切るため、霍去病が河西回廊を開通し、西寧市から西に臨羌県を置いた。後漢の時代には、護羌校尉が置かれた。紀元前61年に、趙充国が青海湖の東から海北地区に屯田し、紀元後4年には、王莽が、青海郡を設置した。4世紀ごろ、鮮卑族が入り、トヨクコン王国を建てた。7世紀から、吐蕃(古代チベット人による王国)は、白蘭、党項などの羌人を収め、現在の青海、チベットなどを含む、青海チベット高原を統一した。このときから、青海一帯はチベット、漢民族を主とした、民族雑居の状態となる。9世紀中葉、吐蕃王国滅亡後、青海の各部落は比較的独立していたが、宋代に入り(11-12世紀)、現在の青海東部地区に、チベット人による唃廝囉政権が建てられた。元代(13世紀)からは、モンゴル族が入り、明清時代(14-20世紀)には、青海東部の農業地区は陝西省と甘肅省の管轄に入り、その他のほとんどは、中央政権の直轄地となった。

1912年、北洋軍閥は馬麒を西寧総兵に任命し、青海地区は馬家の軍閥統治時代に入った。1929年、青海省成立。1950年1月1日、青海省人民政府が正式に成立した。省都は西寧市。青海省は西寧市、海東地区と海南、海北、黄南、玉樹(ユイシュ)、果洛(ゴロ)の五つのチベット族自治州と海西モンゴル族チベット族自治州の八つの市、地、州を管轄し、全部で48の県、民族自治県及び県レベルの市がある。

青海省地区の民族 現在、青海省には、チベット族、漢民族、トゥ族、モンゴル族、回族、サラ族、ハザク族などの民族が住んでいる。これらの民族は、まさに、青海の発展過程の体現である。漢民族は、主に青海省東部地区に居住している。B.C.121年、霍去病が河西回廊を開いたときから、漢民族の移民は、途切れることなく青海に入り込んだ。特に唐代からは、河西回廊と青海で頻繁に繰り返された、吐蕃、唐間の戦役により、青海省の東部地域は、チベット族と漢民族の雑居地となった。現在の漢民族は、主に明清代の移民である。トゥ族は、4世紀のトヨクコン王国と密接な関係があると考えられている。現在は、主に青海省東部地区に居住し、農業に携わっている。長期にわたって、チベット文化と漢文化の影響を受けてきたため、トゥ族の生活文化には明らかなチベット文化と漢文化の特色が見られる。モンゴル族は、13世紀にチンギスハンに率いられて青海と河西回廊に入ってきたときに住み着いたものもあるが、多くは明代以降の移民である。16世紀に吐黙特部の俺答汗が河套地区から、17世紀に和碩特部の固始汗が新疆から入り、青海とチベット全域を占領した。1726年に固始汗の孫の羅布蔵丹津が清政府に対して反乱を起こした

ため、清政府は青海に弁事大臣を置き、モンゴル29旗と青海南部のユイシュの土司（首長）たちを統括させた。その後、モンゴルの力は次第に弱まり、民国期には、29旗とはいうものの、実際には海西地区に8旗のみで、それもチベット化していった。青海東北部には西寧府が置かれ、明代の土司制度を継承しつつ、甘粛省の管轄化に置かれていた。

回族は、唐・宋代に大食、ペルシャの商人がこの地を經過して長安に行く途中で住み着いたのが始まりである。しかし、主に元代以降モンゴル軍が中央アジアから職人を集め、陝西一帯に住ませたものである。1330年チンギスハンの弟のひ孫である封速来蛮が西寧王となり、この期間にイスラム教の宣教師が宣教した。また、「ドーソンモンゴル史」には、唐兀鎮（昔の西夏のあったところ）の守である、阿難達（元の成宗の従弟）がイスラム教を信仰し、そのため配下の15万人がイスラム教に改宗したため、寧夏は回族の居住地になったと記されている。明代からは、回族とイスラム教は西北部で次第に勢力を増していった。サラ族は、古くは、「撒魯爾」といい、西突厥烏古斯部の一部落であった。烏古斯汗は六人の息子がおり、その内の一人が塔克汗である。塔克汗には、四人の子どもがおり、その中の一人が撒魯爾である。撒魯爾は六人の子どもがおり、部落は大きく六つに分けられ、さらに75に分けられていた。この六大支族の中の一つが、太克である。太克の12の小支族の中に阿什汗がいた。その息子孛勒芒はモンゴルが西征してきたときに追われ、170戸を率いて西夏に至り、さらに秦州（現在の甘粛省天水）から向きを変え、青海領域内の純化にたどり着いた。その後チベット族と通婚し現在のようになった。

II. 青海チベット族の歴史

1. 考古学資料に見られる古代チベット人の活動

青海省では4300箇所あまりから考古学的発掘がされている。省全体の各種博物館に所蔵されている文物は20万件あまりに達し、そのうち新石器時代と青銅器時代の文物が三分の二を占めている。これらの文物には彩色陶器、玉器、磨製石器、青銅器などがある。特に注目すべきなのは、これらの出土品と、現代のチベット族の文化との間に密接な関係が見られることである。

特に、河湟地区一帯で発掘された一連の新石器時代と青銅器時代の文化遺跡及び墓には、地方色が色濃く見られる。また、海西州などでは、野生のヤクときれいに並んだ“鷹隊”（鳥の形象）が描かれた、3000年前の岩画も発見されている。

この時期の文物の特徴をまとめると、次の四点を挙げることができる。①彩陶、玉器、磨製石器、青銅器に特色があること。②多くは湟水と交鶴の流域に分布していること。③チベットで発見された新石器文化（カル遺跡、チュゴン遺跡）と密接な関係があること。特に単耳罐、双耳罐、円底鉢、高柄豆、高領鼓腹部罐など。④現代のチベット族の文化と

も関連が見られること。たとえば彩陶の「五人舞踏彩盆」に描かれている絵と、現在の「ゴルジュ」は関係があり、「銅泡」はチベット女性の服飾にも似た点がある。また、岩面の人の字形の鳥の図案もチベット女性の服飾に見られる。

2. 文献時代の青海チベット族

神話時代 チベット族や、ほかの高地民族の神話では青海チベット高原が形成される前は、広々とした海だったと語られる。後に天女または観音が水を引かせて深い森が現れた。その森にはさまざまな動物や鳥がいたが、人類の祖先のサルもいた。サルは洞窟にすむ魔女と結婚し人間を生んだ。人間は森から出てきて、農耕を始め、現在のようになったのだという。これはチベット族の起源についての主な神話のひとつである。

邦国時代 「敦煌チベット語文献」及び12世紀以前のチベット語文献（「ディウチュエチュン」など）の記載によると、昔チベット族は、セイ、ム、アドン、シドンの四つの部族に分かれていた。セイは現在のアリ地区のシャンシュン部落である。ムーは天神を崇拝するヤルザンブ川流域のヤロン部落である（ヤルザンブ川の流域にはほかに40の小国があった）。アドンは北方の党項部落、シドンはさらに北方のソンバ（蘇毘）である。これらの部落は青海チベット高原に住み、次第に統一され、現在のチベット族を形成していった。分裂時代の小国から見ると、青海地区のチベット族はシドンとアドンから形成されていたようだ。これは中国語文献に記載されている羌族の中の蘇毘と党項である。

吐蕃時代 663年ソンザンガンブが、青海湖周囲のトヨクコン部落も含めて青海チベット高原を統一した。781年にはザンブチスムダザンがさらにその範囲を広げ、吐蕃の勢力は現在のトルファンや敦煌を含む河西地区にまで至った。吐蕃は7世紀以後9世紀中葉に青海東部に唐軍が駐留するまで、青海全域を抑えていた。チャダム盆地の南端にある青海省海西モンゴル族チベット族自治州都蘭県には千以上の吐蕃の古墓がある。伝統的なチベット語歴史書には、青海、四川に住むチベット族はドメチベット族、ドドチベット族と呼ばれた。敦煌文献にはすでにドメが毎年集会を開くという記載がある²⁾。

ゾンカ王時代 9世紀中葉、吐蕃国は分裂し、その後半世紀あまりの紛争の時代を迎える。10世紀初頭、青海チベット高原は落ち着きを取り戻し、大小の多くの部落王国ができた。青海東部の河湟地区では3・4の小国が次第に統一され唃廝囉小王国が、河西回廊の東部には「六谷部落政権」が出現した。

2) 王堯、陳踐「敦煌本吐蕃歴史文書」15ページ：「子年（676年）……ドンブは青海に大行軍衛を設置した」。19ページ：「寅年（702年）……ナムトンジョムで召集されたドメの冬の連盟部落会において……」。卯年（703年）……ドメの冬期会議はユルのジビで開かれた。」などがある。

3. 現在の青海チベット族

現在青海地区のチベット族は方言から分けると、主にアムドとカムバの二つの系統が見られる。アムドチベット族が主で、ユイシュ以外の地域に居住している。カムバチベット族はユイシュチベット族自治州に住んでいる。古いチベット語文献と漢語文献によると、アムドチベット族はチベットから来た昔の吐蕃の進駐軍のほか、より多いのは、おそらくアドンの末裔である。これはすなわち、漢語文献の党項羌族の一部族である。カムバチベット族はシドン（蘇昆）氏族の末裔と考えてよいだろう。この二つの部落は、現在、英雄叙事詩「ゲサル」の主な伝承者である。アムドチベット族の中にも、“ホアリ”チベット族、“シャド”チベット族、“ジュツァン”チベット族など、多くの分枝がある。これらの分枝は、多く、居住地やかつての部落と密接な関係がある。しかし、一般的にいうと、放牧地区のチベット族（ジュフバ）と、農業地区のチベット族（ロンワ）のように、生産活動に基づいて分けられる。

III. 青海チベット族の民俗文化

先に述べたように、青海のチベット族の文化は、主に生業によって農業と放牧業に大きく分けられる。また、その系統から見ると、青海地区には二つの分枝があり、それぞれに独自の民俗文化を具えている。しかし、長期にわたり、同じ地域で生活、交流したことで、民族としてのアイデンティティにより、共通する部分も多いので、以下、農業と放牧業という角度から主な民俗文化を紹介する。

1. 住：帳圈と庄廓

放牧チベット族の住居：テントと帳圈

青海地区のチベット族は主に放牧に従事している。放牧に従事するチベット族は主にテントに住んでいる。このテントは普通黒で（ヤクの毛で作るため。ヤクの毛は黒が多い）、形状的には、四面八角である。この形状は、テント内に梁を一本、柱を二本立て、テントの外に八本の支柱を立てるからである。テントを建てるとき、まず、長い梁の両端を二本の柱で持ち上げ、黒いフェルトを梁に掛ける。それから、梁の両端に八本の縄を結び、テントの外に立てた八本の柱の上に結び、さらにそれぞれの柱の上から縄をひき、地上に楔を打ち込む。このようにして、四面八角の黒ヤクで作ったフェルトのテントができる。テントの上部には開けることのできる窓がついていて、採光ができるようになっている（写真2-3）。

テントの中は、かまどを中心に自然に左右に分かれている。左が上座で、男や客が座り、右が下座で女の座るところになっている。かまどに面した一番内側にはタンスを置

き、その上に仏壇を置く。

テントは二種類あり、黒いヤクのフェルトで張ったものと、白い布で張ったものがある。白い布で張ったものは涼しく、移動にも便利である。ヤクのフェルトのテントは暖かく、一般の住居はこれである。テントの前にはタルチョを立てる。

伝統的には、いくつかのテントが円を作る。これを帳圈という。一つの帳圈が小軍営という意味で「ツォワ」と呼ばれる。これが、一つの部落、または親族関係である。中央には首長のテントや、家畜を置く。帳圈の外に牧羊犬をつなぐ。放牧地区の改革により、帳圈は牧畜隊、牧畜公社、牧畜郷などとなったが、現在は、ほとんどが個人で放牧を行い、牧草地は個人或いは牧畜隊の所有となっている。そのため、帳圈制度の居住方式も崩れ、個別にテントを張るように変化してきている。



(写真2) 遊牧地域のテント



(写真3) テントの内部

農業チベット族の住居：庄廓

青海東部の河湟地区といわれるところは、青海農業の主な生産基地である。ここのチベット族は、「庄廓」といわれる家に住んでいる。庄廓の四方は土で塼を築き、北側は山を背にしている。土壁の四隅に白い石を立てる。建物は塼に沿って三方に建てられる。北に建てられるのが母屋で、東と西は側房である。南には建物を建てず、門を構えるか、実のなる木を植える。敷地の中央に小さな花壇をしつらえ、花壇の下には宝物を入れた瓶を埋める。

伝統的な家屋は土と木で作られ、屋根は平らである。母屋は北側の山を背にして南向きに建てられる。普通、横並びに3部屋か5部屋ある。中央が正堂で、仏壇を置いたり、家の神を祭る。左側は客を接待したり、家族が集まる部屋で、食事もここですると同時に、主人夫婦の寝室でもある。客用の寝室も左側にある。右側は普通の寝室で、さらに右に台所がある。また、東西の建物は、子どもたちの寝室や物置、家畜小屋として使われる。便

所は敷地内の東南の隅か敷地の外に置かれる(写真4-5)。

一つの村は「デワ」と呼ばれ、家々は隣り合わせて建てられる。一つの村は、30から100戸以上で形成される。現在この地区では、純粋にチベット族だけの村は少なくなり、ほかの漢民族、回族、トゥ族などの民族と雑居していることが多い。

このような住居の建て方は、吐蕃時代の伝統的な平屋根建築とも関係があるが、漢民族の農業に対する考え方や農業技術の影響が非常に大きい。

現在、政府の指導により、放牧チベット人も「庄廓」に住むようになってきている。放牧民は自分でレンガを組み立てて家を作り、冬季用の住宅にしている。最近、三江の源の生態環境を保護するために、引越しが行われており、部落全体で引越すケースもある。規格の統一

された赤いレンガの家が、一列ごとに草原に立ち並んでいる。しかし、おもしろいことに、庭にテントを張ってそこに住んでいる人もいる。

2. 食：乳、肉、茶と炒め物、小麦粉食品

放牧地区：乳、肉、茶

放牧地チベット族の普段の食べ物は、ツアンパ、ヤクの肉と羊肉、乳製品、お茶と、「トゥブバ」といわれるハダカ麦や小麦粉をこねたものを小さな粒にしてスープで煮たものである。ヤクの乳製品およびヤクの肉と羊肉が放牧チベット族の主な生産品であることは、あらためていう必要はないだろう。ツアンパは「炒面」とも言い、高地で産する一種のハダカムギを炒めてから、これを挽いて粉にしたもので、各自の碗の中でミルク茶、バターなど加えてこね、小さな塊にして食べる。これは放牧チベット人の主要な食品である。特に注意したいのは、チベット人は、お茶なしでは食事ができないということだ。



(写真4) 農業地域の民家(庄廓)



(写真5) 民家(庄廓)の庭

チベット人の普段飲むお茶は、「茯茶」という。これは、歴史上、漢チベット間で行なわれたいわゆる茶馬貿易で交易されたものである。入れ方は、すべて、煮出すのが基本である。茯茶と塩を鉄の壺に入れて沸騰させたものをそのまま飲むこともあるし、これにヤクの乳を入れてミルク茶にすることもある。さらにヤクのバターを加えると、バター茶になる。バター茶は、チベット地区では、塩を入れて煮出したお茶をバター桶の中に入れてかき回して作るが、青海でもチベット地区と同じ作り方をするとところもある。

最近では、牧畜の方法が変化したため、放牧地区でも野菜炒めなどを作るようになってきた。

祝日の食品には、「シム」と呼ばれる油で揚げる菓子（バター、蕨麻などで作った菓子。チベット地区では「トゥイ」と呼ばれる）、酒、羊肉の肉まん、腸詰めなどがある。

最近、放牧民の生活の改善や、交易及び交通が便利になってきたことにしたが、祝日の食品もしだいに普段から食べられるようになった。また、都市部から入って来るさまざまな食品を食べることもできるようになった。

農業地区：茶、炒め物、小麦粉食品

農業地区では、放牧地区に比べて栽培野菜や穀物が簡単に手に入るの、普段の食品もお茶のほかは、主に小麦粉食品および野菜炒めになる。お茶は、放牧地区同様、三度の食事に欠くことのできない飲み物である。放牧地区と異なるのは、農業地区では主に煮出しただけの茶か、普通の牛の乳を加えたミルク茶を飲むことである。ほかに、イスラム民族がもたらした麦茶や蓋碗茶がある。

炒め物は、材料が多少異なるだけで、作り方は中原地区と同じであるので、ここでは詳しい説明はしない。農業チベット族の小麦粉食品には、確かに特色がある。これらは、汁気のあるものとないものに二大別できる。汁気のないものには、「油花」（ハダカ麦を挽いたもので作ったマントウ）、「鍋盔」（薄餅に似ているが、比較的厚い）、「空鍋」（特別な鉄のなべで作る。丸いパンのようなもので、外はカリカリしていて、中はやわらかい）、マントウなどがある。汁気のあるものには、「面片」（ちぎり麺）、「坩面」（延ばし麺）、「扁食」（ゆでギョーザ）、パオズ、冷麺など、さまざまな作り方がある。

農業地区チベット族のこれら食品は、青海のその他の民族も普遍的に食べるもので、広く言えば、中国西北地区でよく見かけるものである。これは、これらの地区で、古代から多くの民族が交流してきた結果だと言えよう。

祝日には、普段のものを丁寧にするほか、牛肉、羊肉、揚げ物を加える。揚げ物は、祝日を表す大切な記号である。比較的特殊なものに、小麦粉をこねたものを揚げたお菓子、すなわち「パンサン」、「サンズ」、「翻筋頭」などがある。これも、青海の他の民族と共通する祝日の食品である。ほかに、タバコ、酒、飴なども、祝日の気分を盛り上げる食品である。

3. 祝日と衣：年越しと六月会

年間を通して、青海チベット族の祝日は、大小あわせるとかなり多い。中でも重要なのは、年越しと陰暦六月に行われる朝山節である。朝山節は六月会ともいわれる。

祝日と民族の生産生活の法則には、密接な関係がある。年越しは、その民族の一年の収穫を神に感謝する儀式である。そのため、伝統から見ると、放牧チベット族の年越しは、旧暦八月に行われる「競馬祭」であり、農業チベット族の年越しは、旧正月だといえよう。しかし、民族間の文化が絶えず溶け合っていくうちに、年越しの時期を決定する暦法にも国家観念が発揮されていった。そのため、青海地区の放牧チベット族も、農業チベット族もともに、その中に組み込まれていった。すなわち、生活は、基本的にすべて漢民族の暦法によって送ることになった。特に農業チベット族にとって、漢民族の暦法は生産に直接かかわるものとして重要であり、そのため、旧正月は、青海のチベット族にとっても、もっとも重要な祝日となった。チベット地区では日常生活の中でチベット暦が使われているが、青海地区ではおそらく使われたことはなかっただろうと思われる。

年越しの特徴は、一定の儀礼以外に、集合の機能にある。ここには、多くの民俗活動が含まれる。青海のチベット族はこの期間に、婚礼、子どもの胎毛を剃る儀式、少女の成年式、老人の長寿祝い、競馬などを行う。このようにして、年越しの活動をより豊富なものにし、まるで、民族の民俗文化を演じる大舞台のようになった。また、年越しの期間には、年始廻りや、初詣などもあり、これらも民族間の交流を促進する。

年越しの準備から、正月15日の祈祷まで、青海チベット族の年越しの期間はかなり長く、儀礼も多い。年始廻りは元日から15日まで行われ、初詣は15日である。地域によっては、元旦に神聖な山に登って祭祀を行なうこともある。

年越し期間中の民族衣装は、特に目を引くものである。親戚の家に年始に行くにしても、婚礼などの民族活動に参加するにしても、人々は「もっとも華やか」で、「もっとも民族の特徴を表せる」服装をする。青海チベット族は部落の違いにより、民族衣装も千差万別である。しかし、基本的には、男性はひざ下までの、女性は脚が隠れる長い上着を着、男女とも右肩を脱ぎ、正装用の帽子をかぶり、珊瑚などの首飾り、ピアス、指輪、ブレスレット、銀の飾り、「お守り」などをたくさん身につける。チベット地区に比べて服の色は鮮やかである。なお、農業チベット族は、普段は漢民族と同じ服装をし、祝日のときだけ民族衣装を着る（写真6）。

青海チベット族の生活の中で、もう一つ重要な祝日は、陰暦六月に行われる六月会である。この祝日は「春の祝日」である。万物を目覚めさせ、成長させるために行われる。暦法からは、この時期はすでに「春」とはいえないが、青海チベット高原では、「成長の春」がやっと来たころにあたる。この祝日は人間自身の成長と、穀物の成長をあわせて祈るので、そのため、農業チベット地区で特に盛んに行われる。

六月会は、おそらく山に詣でる活動の変化したもので、漢民族地区の縁日に相当する。しかし、中国南西部の少数民族の間で行われる「三月会」とは、更によく似ている。主な活動は、友人を訪ねたり、交易をしたり、外で遊んだりすることである。この祝日には、若い男女は盛装し、誰にも干渉されることなく、ラブソングを歌い交わしたり、遊んだりする。六月会は、青海東部の多く



(写真6) チベット族の女性：祭りの盛装

の地域で行われるが、開催の時期には多少の違いがある。しかし、ほぼ陰暦六月のうちにされる。そのため、六月会のハシゴを趣味とする人も多い。

4. 民間文芸：「ゲサル」、「ライ」と「花児」、「ゴルジュ」

青海チベット族の民間文芸は非常に豊富であり、祭りの期間には特に異彩を放つ。しかし、農業地区と放牧地区とでは微妙な差が存在する。それは主に、農業地区では比較的他民族に近いものが多いが、放牧地区では、ほかの民族には見られない独特の風格を多く残している点に見られる。

英雄叙事詩「ゲサル」は、主に青海チベット族の放牧地区で広く行われ、独特のものを残している。しかし、農業地区では、語り物形式の「ゲサル」はあまり見られず、昔話のような形式で流布している。「ゲサル」は青海チベット族の周辺民族にも大きな影響があり、モンゴル族、トゥ族、サラ族にも伝えられている。

青海チベット族の民謡も、ほかの民族の民謡と密接な関係がある。例えば、チベット民謡の体系における「ライ」は青海および西北地区の多くの民族に歌われる「花児」と深い関係が見られる。農業チベット族にとって、中国語とチベット語を織り交ぜて「花児」歌うのは当たり前のことである。「花児」は偶数句に韻を踏む四句形式の短いラブソングであるが、その構造から、曲調まで、放牧地区のチベット族が歌う「ライ」体のラブソングと非常によく似ており、その影響関係を明らかにするのは難しい。

青海のチベット族は、農業、放牧を問わず、祭りの期間に独特の踊りを踊る。チベット語で「ゴルジュ」といい、輪になって踊るという意味である。この踊りは、現在青海チベット高原に暮らす民族だけではなく、かつてこの地で暮らしたことのある、リス族、ナシ族民族などにも見られる。

この踊りの特徴は、祭りの期間中、昼も夜も男女の区別なく輪を作り、歌いながら踊る

点にある。多くの曲と多くの振りがあり、三日三晩踊り続けることもできる。この踊りは、新石器時代の「五人舞踏」に非常によく似ており、深い関係があるのではないかと考えられる。そうであるとすれば、この歴史は非常に長く、高地民族の歌舞の活ける化石ともいえるだろう。

5. 信仰と儀礼：寺参り、神山、聖湖と家神

青海チベット族の信仰は、主にチベット仏教と民間信仰であり、この点においては、農業チベット族と放牧チベット族の区別は、基本的に存在しない。チベット仏教は、すべてのチベット族に共通するもので、宗派による多少の違いはあるが、大きな違いはないので、ここでは詳細を省く。

民間信仰は、神山と聖湖に対するもので、青海チベット地区では多少特殊な様相を示している。青海のチベット地区では、ほとんどすべての村や部落に自分の神山がある。聖湖は多くはないが、深く信仰しており、特に放牧地区ではこの信仰は特に重視されている。青海湖はチベット語ではチシュジャモ、或いはツォウエンブといい、青海地区最大の聖湖である。古代においては、役人が「海祭り」を執り行ったという記載がある。アニマチンは青海地区最大の神山で、アニマチンに対する信仰はチベット全域にわたっている。

山神と水神を祭る方法はさまざまであるが、一般的には、酒、食物およびルンダを供える。時には、それぞれの神山、聖湖で決まった祭り方がある。経を唱え、神の栄光を賛美し、その保護をこいねがう。

この点、青海漢民族の神山の崇拝と近い。漢民族は青海省西部に聳え立つ崑崙山は道教の聖地であり、中華民族の文化史上「万山の祖」として確固たる地位があると見なしている。漢民族にとって、「宣気」、「万物を生む」という特殊な力があり、不老不死や神仙思想と深く結びついた神山である。崑崙山の主人は「西王母」で、「瑶池」は青海湖であるとの見方もある。

青海放牧地区のチベット族の神山、聖湖信仰に比べて、農業地区のチベット族はどちらかというの家神を重視している。家神はそれぞれの家の信仰で、神山、聖湖に対する信仰同様、仏教の体系に組み込まれた護法神である。その職能は家庭を守り繁栄させ、悪霊などが侵入しないようにすることである。農業地区で比較的多く祭られている家神はホータンラモである。これは、ラサの守り神でもある女神であり、また、チベット仏教の一派であるゲルク派の守り神でもある。

ここに述べた以外にも、青海チベット地区には多くの特色ある民俗活動が行われている。婚礼、一妻多夫、葬送民俗における鳥葬など、ともに特色のあるものではあるが、紙面の都合で別の機会を待つことにする。

まとめ

青海チベット族には多くの民俗文化があるが、そこには、民族としての歴史の中で継承したり新たに作り上げてきた部分のほかに、青海という土地で生活する多くのほかの民族の民俗文化との共通点も見られる。このような民俗文化現象の出現は、まさに多民族の民俗文化の交流の結果であるといえる。

チベット族の牧畜と信仰文化の影響 青海チベット族の牧畜業は非常に発達している。1100年以来蓄積された豊富な経験は、この地に移ってきたほかの民族に直接影響を与えている。特に牧畜によって暮らす民族は、多かれ少なかれ自然に牧畜生産のうえで、チベット族の民俗文化の影響を受けている。中でもモンゴル族においては顕著で、その生活はほとんどチベット化し、日常生活ではチベット語を使う地域さえある。

また、チベット族は7世紀以来、仏教を信仰し続けてきた。仏教文化を通じて、チベット族の民俗文化は深いところで青海に移ってきたほかの民族に影響を与えている。この例は、特にトゥ族によく見られ、信仰活動や儀礼、子どものおまじないに至るまでその影響が見られる。

漢民族農業文化の影響 考古学的資料から見ると、青海河湟地区では4000年前から農業が行われていたが、その生産方式についてみると、漢民族の農業文化の影響が極めて顕著である。漢民族文化は、長期にわたりこの地に途切れることなく流れ込み、その先進的な生産方式は、この地のほかの民族、特に農業に従事する民族の民俗文化に直接的な影響を与えた。

特に目立つのは漢民族の暦法の影響である。これは、この地で暮らすほかの民族の生産生活に直接影響を与えている。また、中国の国家観念の影響を受け、この地のほかの民族は、漢民族の文化を正統なものだと考えているため、その影響は非常に深い。

回族などイスラム教民族の食文化と商業活動の影響 食文化には、各民族はそれぞれの特色を有している。放牧チベット族の食生活は、長年大きな変化はなく、自然の生活方式にあったものを形成してきた。しかし、民族間の往来が日々密接になり、特にイスラム教民族との接触は、砂漠と長旅の中で形成された食文化をもたらした。彼らは特に小麦粉の加工に優れ、この地区の各民族の食文化を豊かにした。また、彼らの商業活動の歴史は長く、青海地区の商業に積極的な作用を及ぼした。

すなわち、この土地ではさまざまな民族が、それぞれの文化を持って暮らしてきたが、そこに根本的作用を及ぼしているのはチベット文化と漢文化であり、その間に多くのほかの民族の文化が入り込んでいる。あるいは、これらの民族の文化はこの二つの民俗文化の間隙にあって、両者の衝突を避けているとも言えるかもしれない。特に元代以来次第に興ってきたイスラム文化は無視することのできないひとつの文化形態である。このように

して現在の青海地区の多様な民俗文化が形成してきたのである。

伝統、融合、変遷が現在の青海チベット文化が面している一つの過程である。そして、この過程は、すでに100年続いてきている。現在特に気をつけたいのは、この、長年にわたる民族民俗文化の交流の中で、青海東部地区と、陝西省西部、甘肅省、寧夏回族自治区などに広がる漢、チベット、イスラムが融合した文化圏が形成されていることである。

参考文献

- 張紅責任編集 2006年『青海省地図冊』中国地図出版社。
 恰白・次旦平措ほか著、陳慶英ほか訳 1996年『西藏通史』西藏古籍出版社。
 黎宗華・李延愷 1992年『安多藏族史』青海民族出版社。
 ジコンバ・ゴンチェフダンバラプジ 1989年『安多政教史』（チベット語）甘肅民族出版社。
 青海社科院蔵学研究所編 1991年『中国藏族部落』中国蔵学出版社。
 青海省誌編纂委員会編 1987年『青海歴史記要』青海人民出版社。
 王輔仁・陳慶英 1985年『蒙藏民族關係史略』中国社会科学出版社。
 祝啓源 1988年『唵斯囉——宋代藏族政權』青海人民出版社。
 周偉洲編 1992年『吐谷渾資料輯録』青海人民出版社。
 青海民委少数民族古籍整理規劃辦公室 1989年『青海地方旧誌五種』青海人民出版社。
 王繼光ほか輯注 1993年『西寧衛誌・西寧誌』青海人民出版社。
 久治県誌編纂委員会編 2005年『久治県誌』三秦出版社。
 1982年『海北藏族自治州概況』青海人民出版社。
 1983年『海西蒙古族藏族哈薩克族自治州概況』青海人民出版社。
 1986年『海南藏族自治州概況』青海人民出版社。
 1984年『河南蒙古族自治县概況』青海人民出版社。
 1985年『果洛藏族自治县概況』青海人民出版社。
 1985年『黄南州誌』（上下）甘肅人民出版社。
 ジュバトンジュブ責任編集 2001年『チャブガ地方誌』（チベット語）民族出版社。
 青海省編輯 1985年『青海省藏族蒙古族社会歴史調査』青海人民出版社。
 _____ 1985年『青海省土族社会歴史調査』青海人民出版社。
 _____ 1985年『青海省回族撒拉族哈薩克族社会歴史調査』青海人民出版社。
 朱世奎 1994年『青海風俗簡誌』青海人民出版社。
 許讓神父・費孝通ほか訳 1998年『甘肅土人の婚姻』遼寧教育出版社。
 周希武 1986年『玉樹調査記』青海人民出版社。
 青海社科院省誌辦ほか 1985年『青海風土概況調査集』青海人民出版社。
 青海政協 1988年『青海文史資料選輯』（10-12合冊本）青海政協。
 梁欽 1993年『江源藏族俗録』華芸出版社。
 田方・張東亮編 1989年『中国人口遷移新探』知識出版社。
 孫懷陽・程賢敏編 1999年『中国藏族人口与社会』中国蔵学出版社。
 費孝通編 1990年『中華民族多元一体各局』中央民族大学出版社。
 王明珂 2003年『羌在漢藏之間』台湾：聯經出版。
 郝蘇民 1999年『甘青特有民族文化形態研究』民族出版社。
 穆赤・雲登嘉措 1995年『青海少数民族』青海人民出版社。
 湯惠生 2004年『経歴原始』广西人民出版社。
 李志農・丁柏峰 2004年『土族：青海互助県大庄村調査』雲南大学出版社。
 朱和双・謝佐 2004年『撒拉族：青海循化県石頭坡村調査』雲南大学出版社。

邢海寧 1994年『果洛藏族社会』中国蔵学出版社.

邦訳／高木立子（中国・北京師範大学民俗学博士）
2005年7月18日(月) 第40回国際学術交流プログラム・
第2回フォーライフ研究会
於 愛知大学豊橋校舎5号館4階541会議室